

南のひと 27

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



イラストレーターの熊谷溢夫さん（84）との出会いは、息子さん夫婦が竹富島で営む「手作り工房 KUMA」の取材をさせてもらったのがきっかけだった。溢夫さんの作品は、月刊「やいま」での連載や、やいま方言むかしばなし『屏風山の蛇』や、『美しい自然があるからみんな元気で生きられる。』（南山舎発行）などで以前から拝見していたけれど、溢夫さん御本人とお話しをしたのはこの時が初めてだった。

今年8月末に石垣市図書館の展示室で溢夫さんの作品展を観て来たことを息子さん夫婦にお伝えすると、「お父さん、今僕達と一緒に暮らしているんですよ」と教えてくれた。

裏座に敷かれた溢夫さんの布団の横には、絵の具が入った容器やパレットが並べられた低い机が置かれていた。疲れたら横になり、起きたら直ぐに仕事に取りかかれるように常に作業机には仕事の用意がされているようだ。

この風景を見た瞬間、「私は生涯現役で写真表現を続けられるだろうか？」と反射的に自分に問うていた。

溢夫さんは、東京のデザイン会社に勤めていた頃、東京日本橋高島屋のイラストを任されていた。その仕事が評価され、他の企業からも声を掛けられるようになり、いくつもの仕事をこなしていたことから体調を崩してしまった。その後、東京から離れて、海外を旅しながら自分の好きなペースで仕事を再開するようになっていった。

1986年ごろ、石垣島のホテルに飾る絵やパンフレット作りの依頼がきっかけとなり、家族で石垣島に移り住むことになった。その仕事の為に沖縄の島々を渡り歩いている時に出会ったのが、島々で語り継がれてきた民話や童話だった。約300話を元に溢夫さんは作品を作りだしてきた。

一私たちのまわりには 命が 満ち溢れている 息ぐるしくなるほどに 満ち満ちた 命たちがひしめき合い それぞれが 糧となり 糧とし （『美しい自然があるから みんな元気で生きられる。』）

溢夫さんの言葉の奥には作品づくりの土台が垣間見える。揺るぎのない土台を築く為、私も撮り続けて行こうと思う。

水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。